転院

医者と患者の事情さまざま

専門科の治療必要な時

「いつ治る」疑問生じて

検査をやり直すムダも

健康スペシャル

転院先に書かれた紹介状の山。この一枚が患者と医師の信頼関係を作るのだが

検査や手術のため、患者が別の医療機関に移ることがよくある。患者の側にも病院を変わりたい、いろいろな理由がある。転院は医者の側の事情だけでなく、患者にとっても重要な問題だ。

札幌市内に住むAさん（75）は、奥さんが神経症で神経科の病院に入院した。本来は心療内科の病気だったので、内科の治療も受けたいと医師に告げた。医師は退院時、「具合が悪くなったら、いつでも行きなさい」と、Aさんに内科医あての紹介状を手渡した。

「妻は難しい病気でしたが、先生が専門医を紹介してくれたので、病院を変えても診察がスムーズにいった」と、Aさん。患者や家族の希望がうまく医師に伝わったわけだ。

医師の側の事情で転院するケースはよくみられる。詳しい検査や薬で経過を診た結果、手術が必要な場合、他の専門科の治療を受けたほうがいい場合などがそれ。検査や手術は設備が伴うので、患者を送り出すのはそれらの設備のない小さな医院が多い。

同市中央区で胃腸科クリニックを開業する水島和雄院長によると、診察を始めた五年前からこれまで、転院した患者は約五百人にのぼる。オフィスビル内のクリニックで、転勤族が多いことも一つの理由。それも道外へ転勤した患者が四分の三を占める。

水島院長は「道内なら知っている医師に紹介するが、道外は病名やこれまでの治療の内容、服用している薬などを紹介状に書き、どこの病院に行っても治療が継続できるようにしている」という。

一方、「いつになってもよくならない」と、患者が治療に疑問を持って、転院したがることもある。

東札幌病院の医療ソーシャルワーカー室谷智子さんは「治療内容や病状の説明を受けていなかったり、聞いてもよく理解できないことが、病院を変わりたいという気持ちに結びつきやすい。病院側も忙しくて患者とゆっくり話をしていない」と、コミュニケーション不足から生まれた不信感が、転院を思い立たせるという。

だからといって勝手に医療機関を変えることは、必ずしも患者にとっていいことではない。同市内の小児科医は「母親が心配のあまり転院することがあるが、前の病院での治療経過も分からず、不必要な検査をされるなどムダなことを繰り返す。転院の希望があればきちんと医師にいうべき」と話す。

患者にとっても医師から医師への紹介は安心するもの。水島院長も「病状などで結論が出なければ、クリニックなど小さな医院はむしろ、設備の整った病院へ患者を紹介する役目がある。医師が患者を離さないといわれるが、転院の希望を聞くことは、長い目でみれば患者の納得する治療をしてくれる医療機関として評価されるのではないか」と指摘している。

両者の意思疎通が第一